

見えないところで失われていく水

奈良市立一条高等学校附属中学校三年

鈴木 陽親

「水不足」という言葉を聞いて、真っ先に思  
い浮かぶのは、乾いた大地やカラの蛇口かもし  
れない。たしかにそれも現実の一つだが水不足  
の本当の怖さは、もつと見えにくい場所にある  
のではないかと私は考える。私たちは、知らな  
いうちに大量の水を使い、消費し無駄にしてい  
る。今回は「暮らしの裏側」「見えない水」「選  
ぶ力」という3つの視点から、水不足の問題を  
考えてみたい。

まず、水は日常の「暮らしの裏側」で大量に  
使われている。たとえば、朝食のトーストに乗  
せるハム一枚を作るのにどれくらいの水が必  
要か知っているだろうか。答えは約百リットル  
。豚の飼育、水や飼料の生産、加工などを含め  
た「バーチャルウォーター」と呼ばれる見えな  
い水の量である。ハンバーガー一個には約二千  
四百リットル。Tシャツ一枚には約二千七百リ

ツトルの水が使われている。つまり、私たちは水を直接使っていない時間でも、食べたり着たりするだけで大量の水を間接的に消費しているのだ。

この「見えない水」、輸入品にも深く関係している。日本は食料や衣類の多くを海外から輸入しているが、その生産には当然水が使われている。つまり、私たちが輸入品を選ぶことで水不足の問題は他国に「見えないかたち」で影響を与えている可能性がある。たとえば、日本が輸入している小麦や牛肉の多くはアメリカやオーストラリアの乾燥地帯で生産されているものだ。現地では干ばつが頻発しており、農業用水の確保が難しくなっている。私たちの暮らしと、遠く離れた国の水問題が実は静かにつながっているのだ。

だからこそ、私たちは「選ぶ力」をもつと意識すべきだと思う。買い物をするとき、環境にやさしい製品を選ぶかどうか、水を大量に使う食品や衣類を過剰に消費していないかを見

直すことは、大きな意味を持つ。たとえば、一日に食べ残しをしないだけで、一人あたり平均約百リットルの水の節約になると言われている。日本全体で見ると、一日で千万トン以上の水の無駄を減らすことができる。これは東京ドーム八杯分以上に相当する量だ。日々の選択が、地球全体の水の使われ方に影響しているという自覚を持つことが、これからの時代に必要なのは「責任ある消費」だと思う。

水不足は、気候変動や人口増加などの複雑な問題と結びついている。けれど、それを「難しいから」といつて他人事にしてはいけない。私たちの暮らしは、見えないところで多くの資源に支えられており、その中には限られた水も含まれている。「水なんて海に行けばたくさんあるじゃないか」と思う人もいるかもしれないが、実際、私たちが安全に飲める水は地球上の水の0.01パーセントほどなのだ。蛇口から出る水だけでなく、日常にひそむ「見えない水」まで意識を向けることで、私たちはもつと深く

問題を知り、行動を変えることができるはずだ。  
。

未来の水を守るために必要なのは、大きな声や特別な知識ではなく、小さな選択の積み重ねだ。ほんの少し食べ残しをしない、ほんの少し蛇口を開けっ放しにしない。その小さい選択が未来を救うと思っただけ。水を「使う」のではなく、「大切に使う」視点で暮らしを見直すこと。それこそが、私たちにできる最も現実的で、確実な一歩ではないだろうか。